

金丸弘美・著

美味しい田舎のつくりかた



ジャーナリスト
(6次産業化プランナー)
吉田 光宏

農業に「おしゃれ」という表現を使うにはちょっと勇気が必要だ。だが、本書が取り上げる「地元にある素材を活用し、料理法や食べ方から人材育成まで食を総合的にデザイン」した起業家の成功例には、びびったりくる。おしゃれとは、手の届かないぜいたく品ではなく、背伸びをすれば購入できる価格、うきうきする幸福感で満たされるような、しゃれたセンスのイメージ。事例のホームページを見ればさらに納得だ。章ごとに見出しをつけてみた。①故郷の島の果実などを加工する人気ジャム店〈山口県・瀬戸内ジャムズガーデン〉②里山に客を呼び込む絶品シェラート〈滋賀県・池田牧場〉③ジャガイモや豆など多品種を直販〈北海道・村上農場〉④野菜200種を産地直送〈香川県・コスモファーム〉⑤6次化のノウハウ&技術を指南〈福島県・山際食彩工

地域の味伝える物語が鍵

房)⑥再生商店街に登場した食&こだわり商品の空間〈香川県・まちのシユール963〉⑦特産品の全国デビューを後押し〈東京都・良品工房〉⑧農家と漁師が持ち込む新鮮産品で大盛況〈福岡県・道の駅むなかた〉⑨素朴な保存食でもてなす農家民宿〈山形県・知懸軒〉⑩「耕すシェフ」育てるレストラン〈島根県・素材香房 ajikura〉。事例では「美味しさ」を伝えるストーリーがあること、6次化は加工販売の知識が不可欠なことなど、成功の条件が的確に示されている。キーパーソンの人となりも親近感を覚える。「地域の誇り」を掲げた前著『幸福な田舎のつくりかた』と同様、画一的で効率優先のグローバル化の対極にある、ローカルの価値を見いだす動きが頼もしい。農業の先端は、おしゃれへと変化しているようだ。

- ◇出版=学芸出版社
- ◇価格=1800円
- ◇副題=地域の味が人をつなぎ、小さな経済を耕す

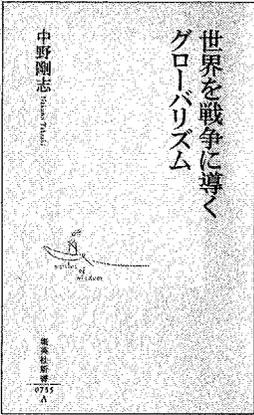
世界を戦争に導く グローバリズム

市場原理主義の危険な本質を暴き出した『TPP亡国論』の続編に位置付けられる。E・H・カーの名著『危機の二十年』に依拠しながら筆者の専門である国際関係論を駆使して著した。

「歴史的な転換点にある」と指摘する。英国、米国、ソ連の覇権国家興亡を決定づけた年だ。米国は歴史上、最後のグローバル覇権国家であり、そ

中野剛志・著

世界を戦争に導く グローバリズム



野生動物管理システム



とめられ、物管理の理方法、加工方法な管理方里地、化、農林の増加、鹿、狼、布が拡大

もう一つの農協

秋田県の旧仁賀保町農協の組織のトッ合長として1973年から96年まで取り組んできた事業と活動、運動を紹介している。貫くのは「一人は万人のため、万人は一人のため」という協同組合運動こそが未来を示す」という思いだ。



もう一つの農協

れを継ぐ国はないと見る。

米国が一極覇権国家の地位を失いつつある中、環太平洋連携協定(TPP)はどう位置付けられるか。オバマ大統領は現実主義へ傾き、輸出促進と雇用創出という自国利益を追う。日米協議での頑迷な姿勢の背景が透ける。東アジアでの日中の覇権戦争といっ

た文脈で尖閣問題を捉えた。中国は尖閣諸島強奪によって東アジアの覇者として認知される。その象徴的な戦略地点とみる。120年前の日清戦争で日本が中国に代わりアジアの中心国になることが示されたように、と説く。